

あけゆく空の

兵庫県立尼崎高等学校 40 周年記念誌

「あけゆく空の」 1963 年 (昭和 38 年) 5 月発行

このファイルを見つけ 青春時代を思い起こして

2021. 1. 16. 採録 by 県尼 37 会 (昭和 37 年 3 月卒)

1963年 兵庫県立尼崎高等学校 40周年記念



## 祝いのことば

反省は躍進への第一歩である。本校40年の足跡を回顧することは決して無駄ではなからう。むしろ今こそ栄ある歴史と伝統に思いをいたし先輩の培われた尼中県尼精神を知るのみでなく、明日への発展の契機となすべきであろう。

阪神間屈指の名門と言われるが、果してその名に値するであろうか。我々教師生徒一同は、負荷された責任の重大性を認識し、一層協力一致の体制を固め、世の期待に答えねばならないと思う。

今は昔、私は尼中初代校長の吉野先生から就任の懇請をうけたことがあるが、今校長として40周年式典を迎えるにあたり、その因縁の浅からざるものを秘々と痛感する次第である。

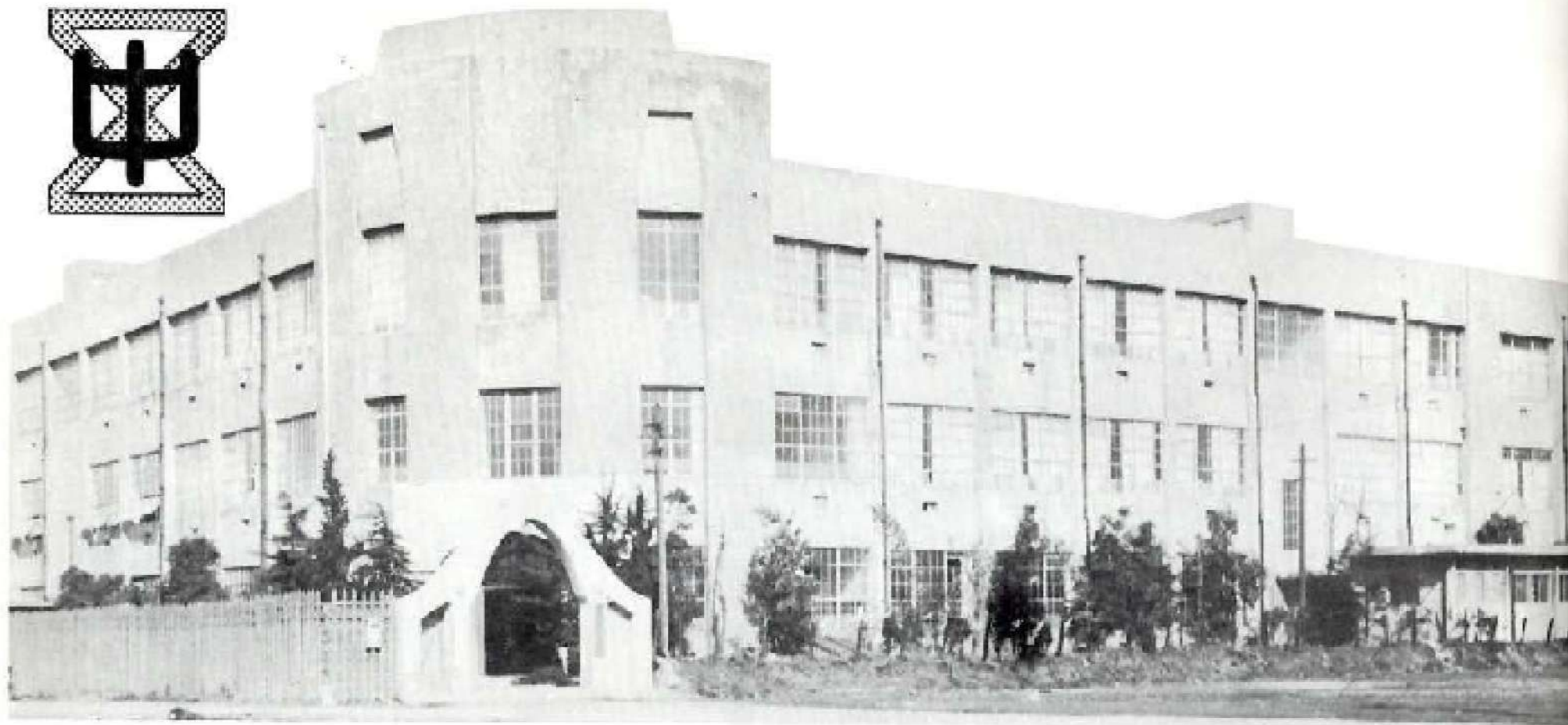
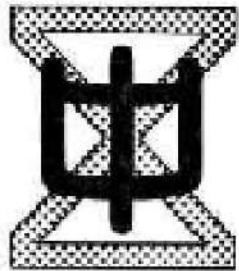
質実剛健の創立当時の綱領は、40年という年月を通して今も尚脈々として生きている。願わくは未来を反照して、一段の栄光が本校に輝やく日の永劫につづかんことを。

1963年 5月 5日

兵庫県立尼崎高等学校長 川崎 操





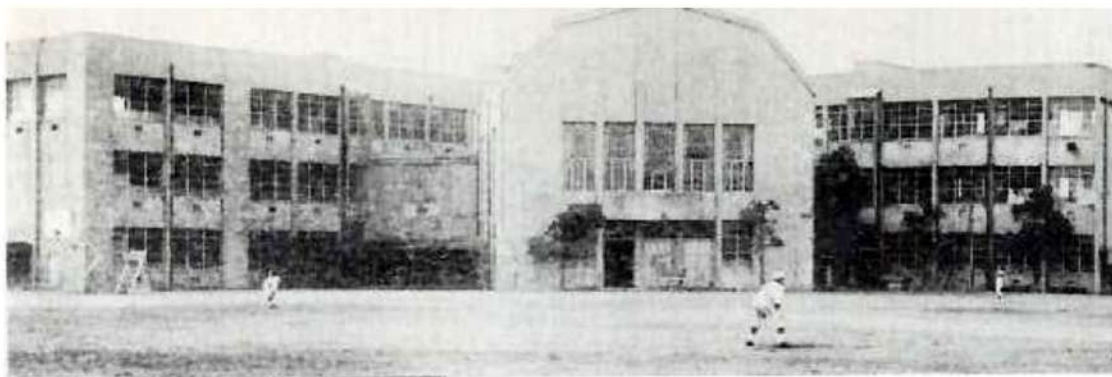


仮教場一右側の建物

尼崎市天神宮の牛車塚が誕生した。大正12年のことである。大正5年尼崎に市制がせまれた時以来の願いが実現するがためにいつてもよいようだ。ちなみに、当時阪神間には伊丹市に公の中学校があったというのだから、どんなにその誕生が熱望され続けられたかがうかがえる。

第1回生の募集は3月末に締められたが、150名の定員に88名の志願者が集まり、尼崎高等女学校（現公立尼崎高）の仮校舎で入学試験が行われた。3月18日に文部省から認可の通知があったばかりのこととて入るべき校舎に期にもあらず、北城内の田浦役所（当時の神宮高等小学校）の一隅を借り受けて授業が始まった。

初代校長吉野半蔵氏の聘任は9月1日（発令は8月17日）のこと



綱領  
質實剛健  
忠信篤敬  
自律創造



オとで一この日関東大震災起り、世情騒然一それまでは、当時の尼崎高女の校長荒川宗太郎氏がすべてを代行された。人格者荒川氏の懇請を入れて着任された漢学者吉野氏は、神戸一中教頭として県教育界に名の通った人物であった。この二氏によって作りだされたわが「尼中」のスクールカラーがどんなものであったかは、綱領や校歌あるいは服装などにしのぶことができる。

現在地に移転したのは翌年の大正13年5月6日のことである。

歌 校

編 武 野 正 氏 作 詞  
同 中 原 之 助 氏 作 曲

調 二 =

1 1 5 5 | 6 6 5 5 | 1 2 3 3 5 5 | 2 - 0 |  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
 1 1 5 5 | 6 6 5 5 | 1 2 3 3 5 5 | 2 - 0 |  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
 1 1 5 5 | 6 6 5 5 | 1 2 3 3 5 5 | 2 - 0 |  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア

5 5 4 3 | 2 1 6 6 | 1 1 6 6 5 2 | 1 - 0 |  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
 5 5 4 3 | 2 1 6 6 | 1 1 6 6 5 2 | 1 - 0 |  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア

2 2 2 5 | 3 2 1 1 | 2 1 2 3 6 6 | 5 - 0 |  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
 2 2 2 5 | 3 2 1 1 | 2 1 2 3 6 6 | 5 - 0 |  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア

6 6 5 5 | 1 2 3 - | 4 3 2 1 2 5 | 1 - 0 |  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
 6 6 5 5 | 1 2 3 - | 4 3 2 1 2 5 | 1 - 0 |  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア

(一) 仰げば萬一此岸の山脈  
わたくしはわたくしはわたくしは  
わたくしはわたくしはわたくしは  
わたくしはわたくしはわたくしは  
わたくしはわたくしはわたくしは

(二) 仰げば萬一此岸の山脈  
わたくしはわたくしはわたくしは  
わたくしはわたくしはわたくしは  
わたくしはわたくしはわたくしは  
わたくしはわたくしはわたくしは

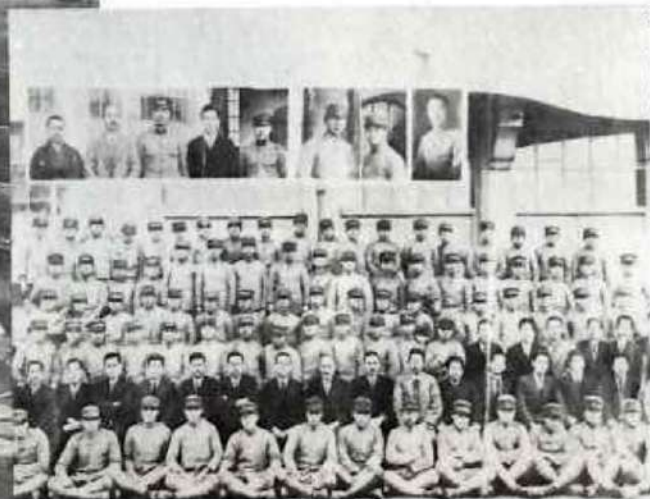


昭和2年、定員750名の「尼中」はここに全学年をそろえて完全な姿をととのえ、西の「一中」(現神戸高校)東の「尼中」と呼ばれる存在となった。時あたかも阪神国道が開通した年のことである。

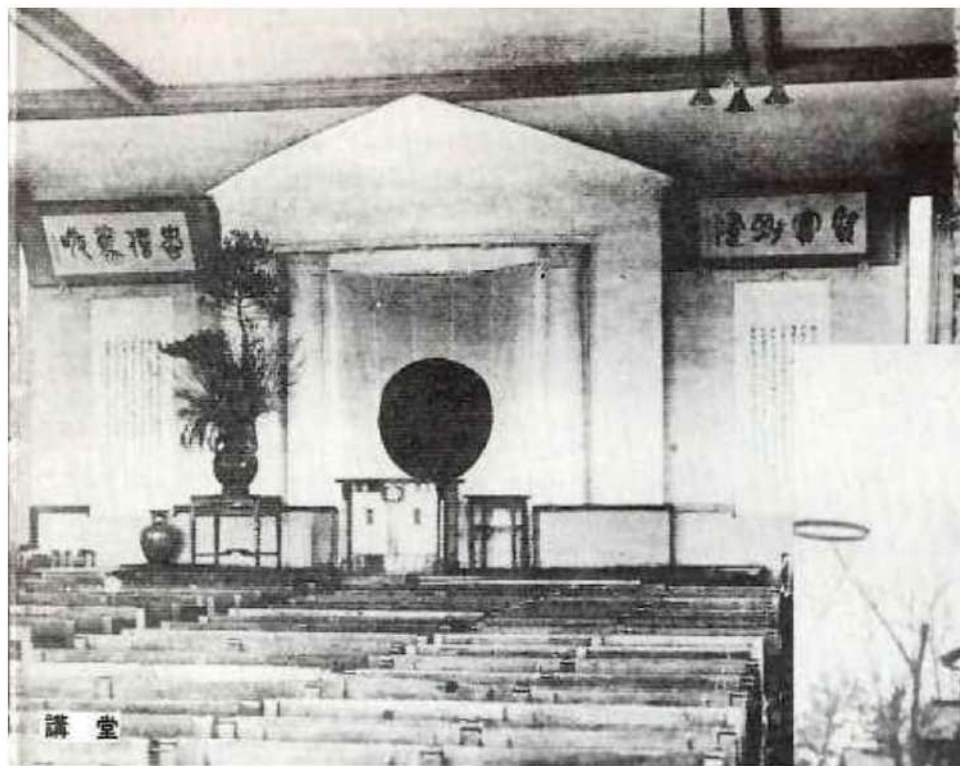
この年を期して校友会が発足し、校友会誌が発行された。創刊号に荒川氏が「尼中誕生の裏面史」とでもいふべき「創設資料」を示している。それによると、学校設立の立役者は当時の市長上村盛治氏であることと、市民の願いがいかに強かったかを知ることができる。写真のチラシは、基金集めに演じた紳士劇の番組で、役員の中には市長や市会議長の名もあるし、一般からの寄付金もつぎつぎと寄せられたそうである。現在なお校舎正面入口内部の壁面には、尼中創設の由来と寄付総額24万732円93銭の明細と寄付者649名の姓名の彫られた銅板がかかげられている。

「嗚呼五年前に夢に見た「尼中」が今は雄たる実在として我々の眼前に活躍しつつある。私共は空想の世界から現実の世界へ進展する「尼中」を見た。而して此の現実の存在が絶えず理想的に向上しつつあることを見るのは喜びに堪えない……」と荒川氏は結び近くに述べておられるが、学校づくりの盛んな今日では味わいがたい純粋なよろこびの表現であろう。

初の卒業式は、昭和3年3月6日に行われた。



第1回尼中卒業生

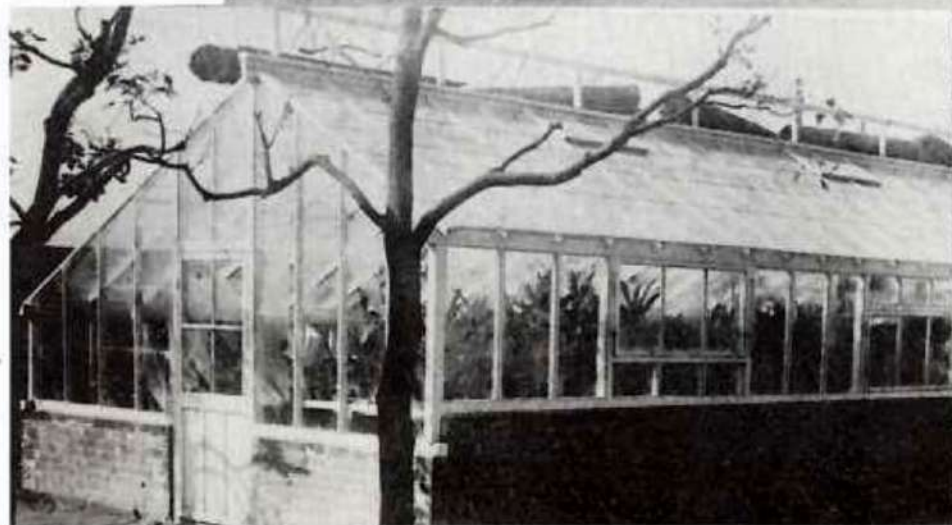


講堂

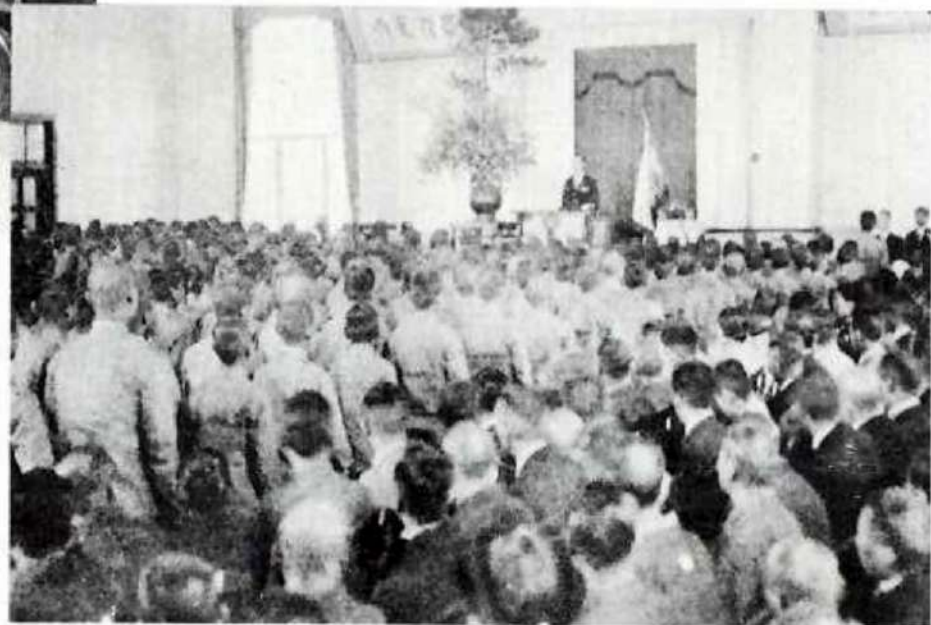
我市民衆  
爲此  
武藝場



武芸場

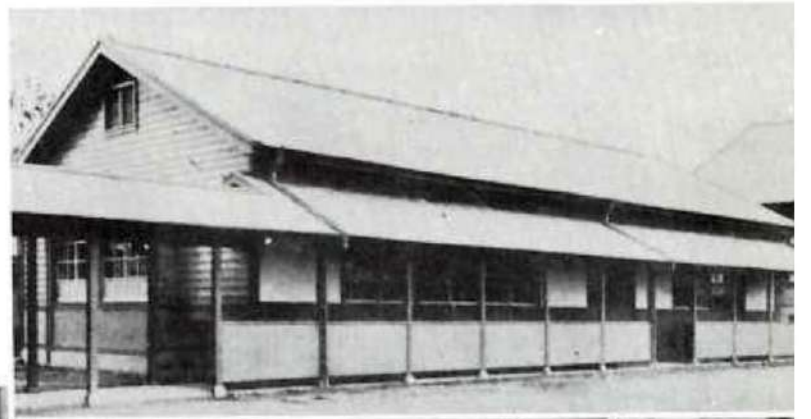
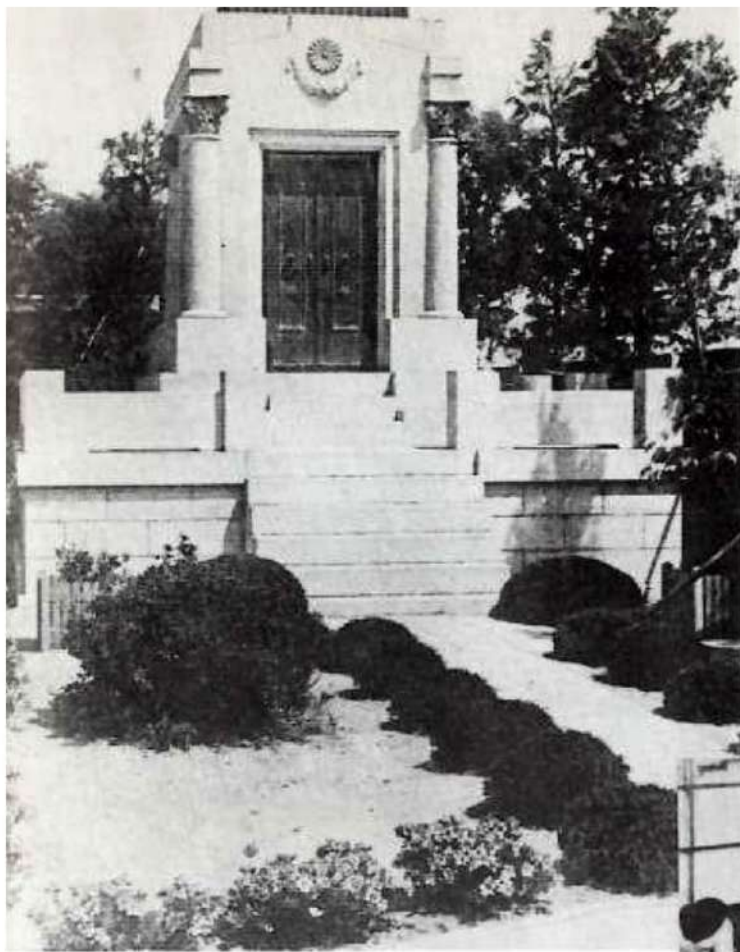


武藝場  
中  
心

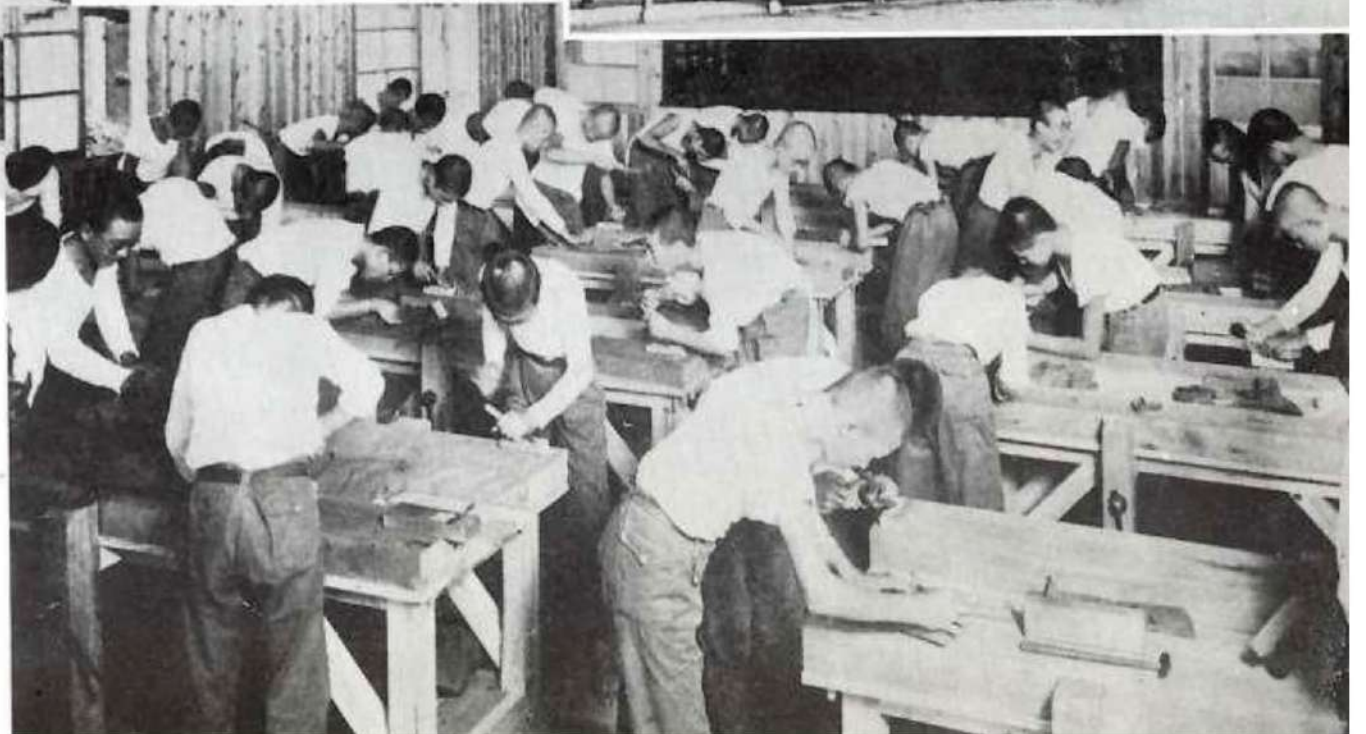


昭和8年、創立10周年記念祝賀の大典が盛大に行われた。その10年の間には「市立尼中」は「県立の尼中」となり（昭和5年）校長も第2代の公江喜市郎氏（現武庫川女子大学長）に代っている。記念事業として、この年発足したばかりの同窓会は御真影奉安殿を寄付した。この奉安殿は終戦の頃まで校門横にあって、登下校する職員生徒のメ



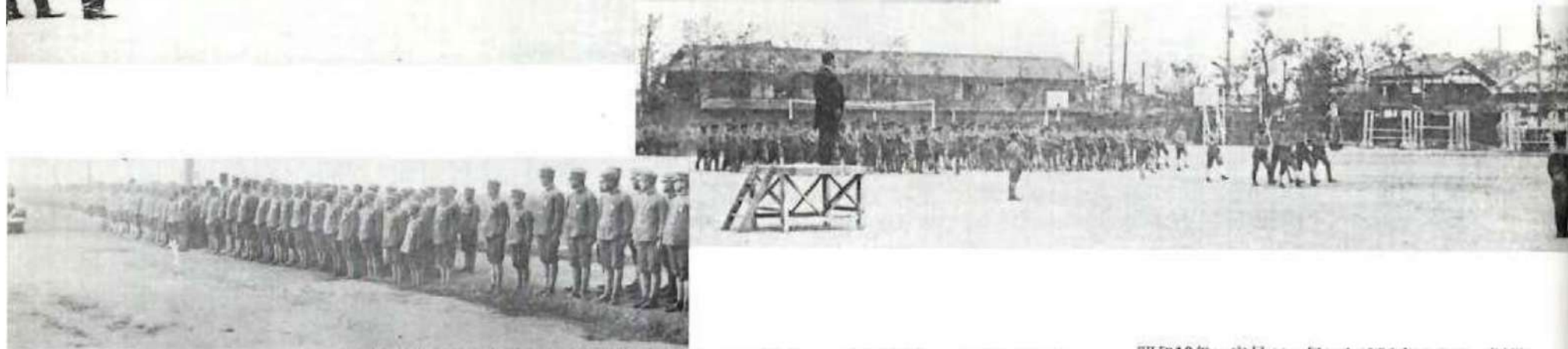


工作教室



オ篤き敬礼を受けて建っていた。

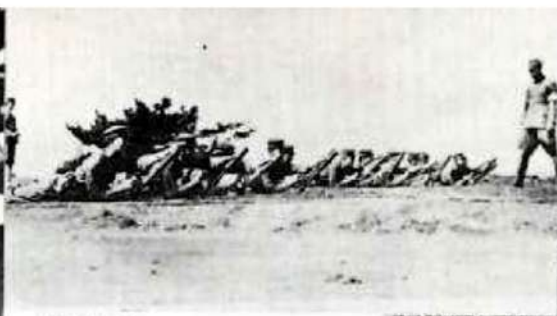
この頃、第一種生、第二種生の制度が生まれ、職業教育も逐次行われ作業科として園芸や工作などの教育も行われた。写真の工作教室が完成し(現在新館のある位置)、全校生徒がカンナやノコギリを扱ったのは、もう少し後の昭和12年頃のことである。



昭和10年、定員が一気に1,250名となり、阪神間の雄校として、名実ともに輝やっていた。

大陸における戦雲があわたしくなるにつれ、学校における教育も軍事色が加わり、毎週一回ラッパ鼓隊の吹奏にあわせてくりひろげられる「閲兵分列」の見事さは全国的にも有名となり、特に優秀校として、皇族宮殿下の御親閲を仰ぐこともあった。写真は昭和11年冬、校門前道路に並んでの賀陽宮殿下出迎えの風景(左下)と、15年李王殿下を迎えて(左上)の査閲風景などをまじえての各種訓練の風景である。

この頃の尼中名物は閲兵分列のほか、ラッパ鼓隊と寒稽古があったが、「独創的研究」が全校生徒に毎夏休課されていたことも挙げられよう。その成果は校友会誌「尼中」その他に掲載され、B Kから放送されたりした。当時の運動部の花形は体操部と射撃部で、明治神宮体育大会に優勝したことも記しておこう。



連合演習



運動会



ラッパ鼓隊





荒川校長事務取扱



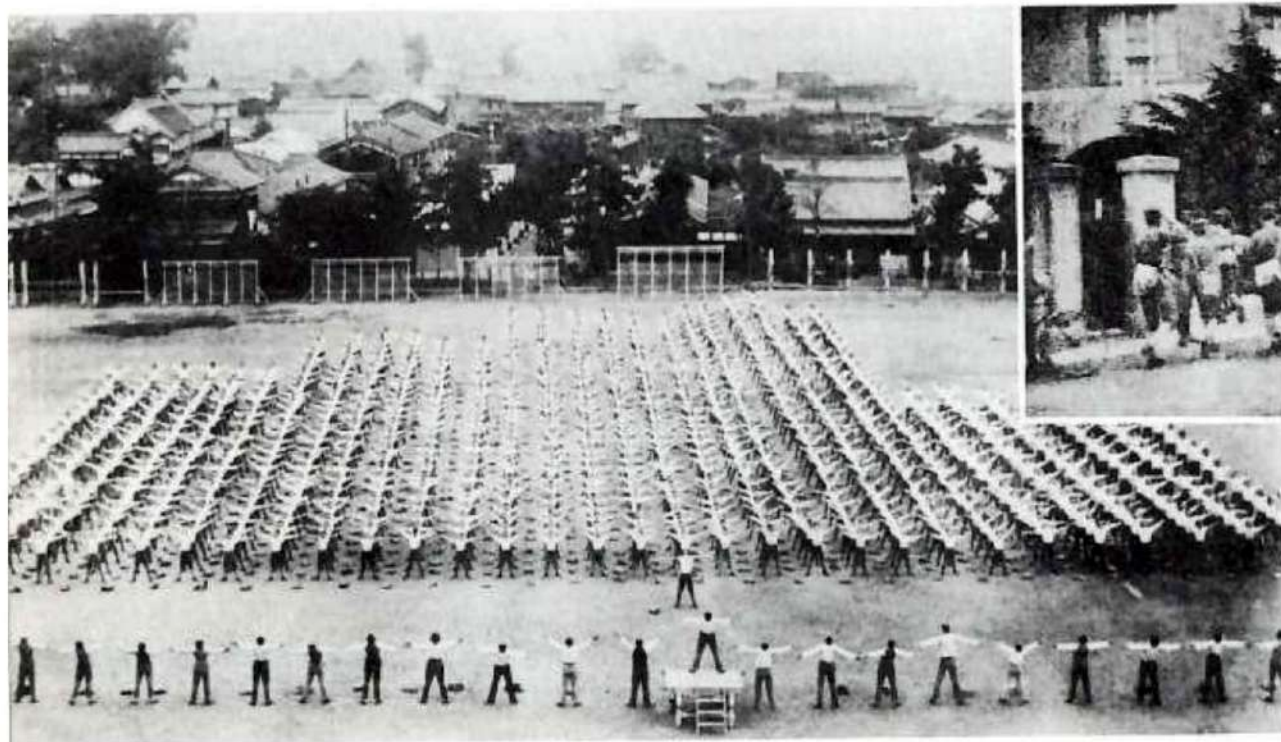
初代 吉野校長



2代 公江校長



3代 山田校長



第3代山田校長、第4代晴山校長らが去って第5代校長に中井修一氏が来任された昭和15年頃は、もはや日本全土は軍国調一色に染まりつつあった。校友会は廃止されて報国団が結成され、個人の人間錬成よりも、国家のために役立つ人間の錬磨が優先し、その方向にすべてが要請された。

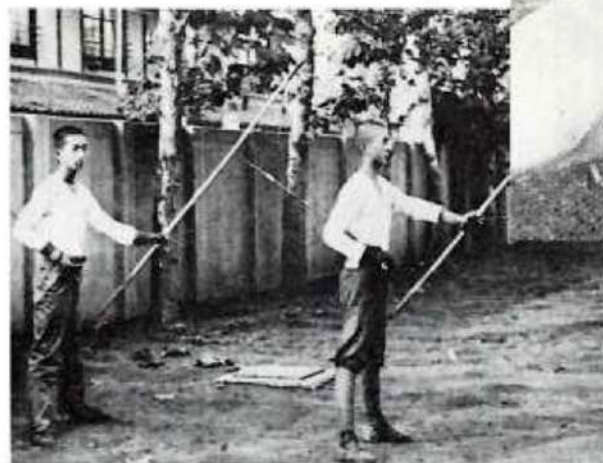
昭和2年に創設された「尼中文庫」は3階中央部に移されて、尼中の文化の灯火であったが、室戸台風の後片づけやオ



4代 晴山校長



5代 中井校長



芋掘り

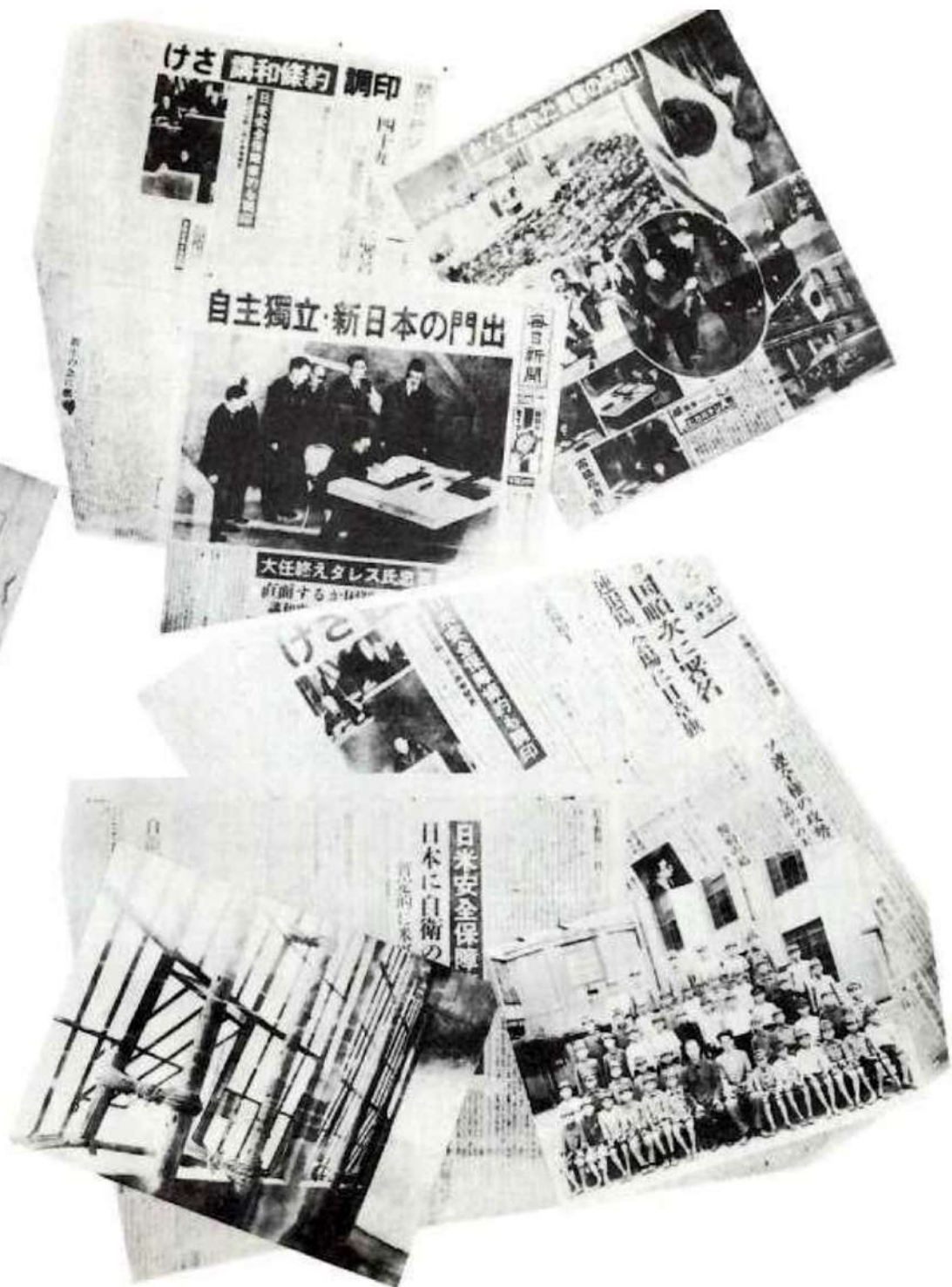


尼中文庫



農家の手伝いに勤勞奉仕隊として動員されるうちはまだよかつたが、戦争が苛烈の度を加えるとともに授業が少なくなり、学徒勤勞隊として工場への出動が命ぜられた後の校庭は、成いは耕やされて畝となり、或いは掘り返されて防空壕となった。19年秋、軍隊の仮営舎となるに及んで、まさに学校は荒廃の一途をたどり、戦争末期の様相は本校にとつても決して明かるいものではなかつたことは否めない事実であつた。





敗戦によって、日本は新しい運命を歩むことになった。が、わが尼崎市にしても、本校の西方一帯、枕瀬、東本町、西本町など広汎な地域が焼失し、この惨めな戦災の痛手がそう容易に回復される筈もなかった。本校また、日本全土の学校がそうであったごとく、新しい教育の立ち向かうところに、苦しみ、悩む時期が暫らく続く。

今日の、美術書にまがう豪華な教科書に比較して、昭和21、22年ごろの教科書の、何ともいじらしい貧弱さよ。因みに写真の「中等国語 三」は、前巻であるが、価格50銭、頁数は表紙とも僅か14頁に過ぎない。

下の写真2葉は、21年尼中最後の入学生のクラス写真と、荒廃し切った校舎内の一部のそれである。敗戦直後の惨めな状況が手に取るようである。

—かくて、戦後も幾年月。21年新憲法公布に始まって、26年には講和条約調印、わが国は激動する世界の時流の真っ唯中を生きぬく努力をひたすら続ける。その間、23年には学制改革が行われ、本校も兵庫県立尼崎高等学校と校名を変更、その名もなつかしい「尼中」の略称も自然発展的解消を遂げることになる。



兵庫県立尼崎高等学校校歌

中松正昭 作詞  
田口寛 作曲

アケユクソラ ノヒヨリナオ  
キボウニモユルワカキラノ  
リソウハナヌノウミヨコエ  
フキクルカセノコートニノリ  
ワガマナヒヤノウチノトニ  
タカクワカラニヒビクナリ

作詞 中松正昭  
作曲 田口寛

一、明けゆく空の日輪よりなほ  
希望に燃ゆる若きらの  
理想は蒼穹の海を越え  
吹き来る風の琴にのり  
我が学舎のうちそとに  
高く清らにひびくなり

二、真澄める空のいや深く  
真理究むる若きらの  
高き理想は六甲山に  
光れる雲の純らかさ  
心に求めつ慕ひつつ  
明日を思ひてたぎるなり

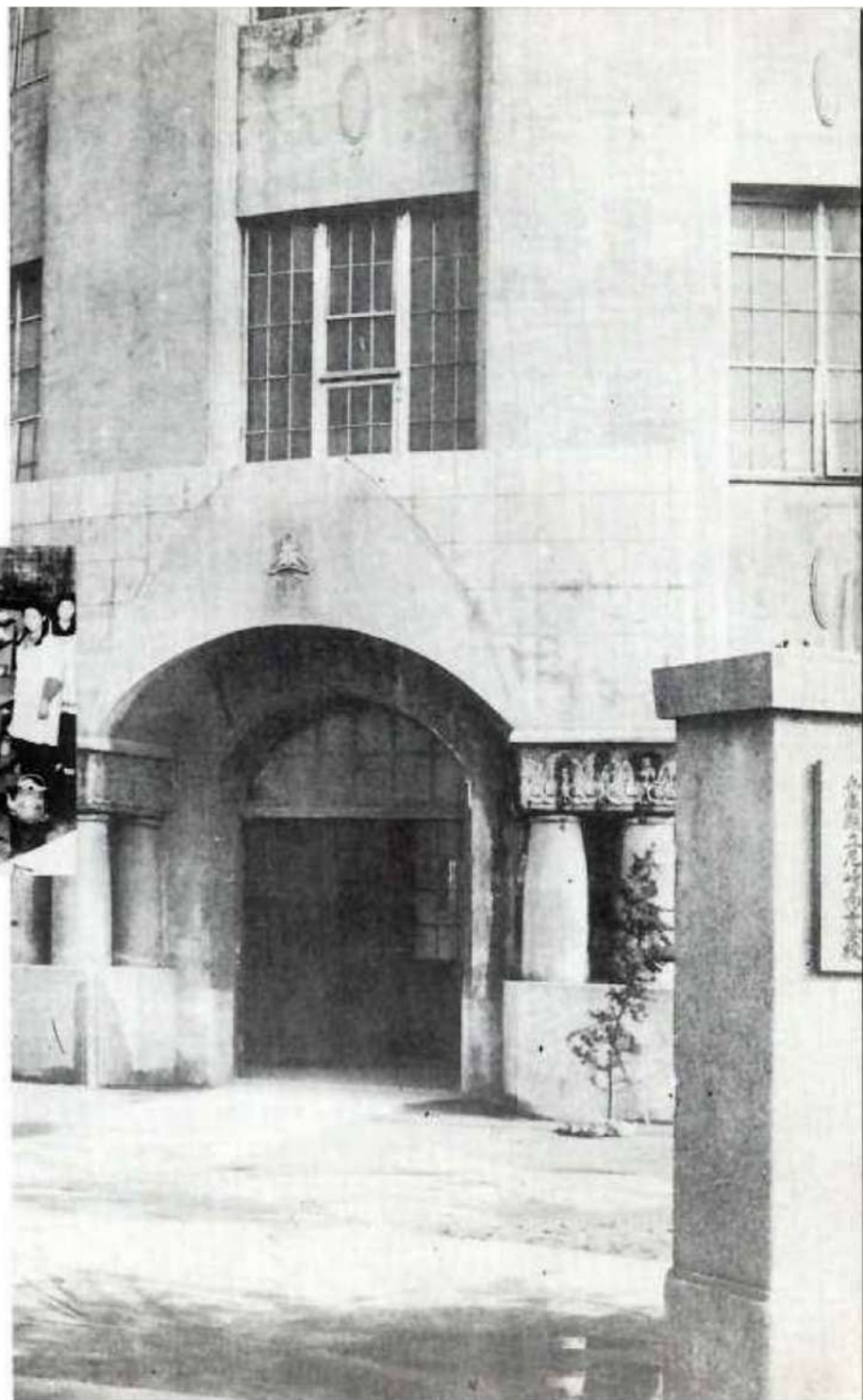
三、あ、我が友ら手をとりて  
茅渚より深く六甲よりも  
高き心を譲へつつ  
新たなる世を誇らかに  
自ひゆく道をあひともに  
この学舎におさめなむ



尼中  
交流合同記念祭





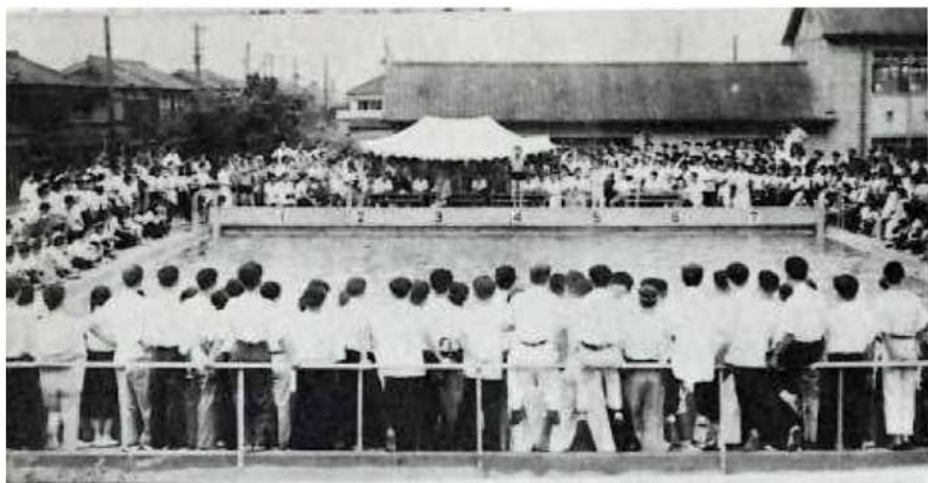


男女共学となり、学校綱領「質実剛健」を以って鳴った本校にも、思いもよらぬ女性が、生徒として、この校門を自由に優にやさしく出入りする時勢になった。

校章も変れば、校歌も「仰げば高し武庫の山」より「明けゆく空の日よりなほ」に改まった。

運動会も、一ト昔前には夢にも見なかった男女合同で、まさに和気あいあい。仮装行列に、てんでに角帽を戴く男装の麗人群が登場しても、もはや周囲は笑顔で迎えるのみだ。また、食堂風景がいかに前世紀的であろうとも、26、27年日本の食生活も、漸く立ち直ってきた証拠には、一方では写真のようにすでに家庭科の割ぼう実習が復活しているということだ。もっとも、教室は現社会科教室だし、ごろりと置かれたカンテキに、争えぬ時代色が出ているのが今となれば興味深い。

旧食堂



プール開き

第15回国体、於熊本



ハンドボールインターハイ



昭和27年、本校は、春の選抜大会に出場する栄を担い、校史を飾る歴史的瞬間を創りだすことになった。初めて聞くまでもあるよい経験と、熱意、感激、輝やかしい思い出が、今も心に焼きついている。現在の野球部の一員の希望を祈るや、切に願う。また、本校は、全日本選手権大会下の各運動部の活躍も次第に目覚ましく、当時優秀な成績を挙げた、野球部、サッカー部、水泳部、陸上競技部、庭球部などに加えて、27年には、女子バスケットボール部が発足している。彼女たちの高く跳ねる健闘に、本校の名譽を担い、活躍を望んでいる。彼女たちの活躍が、本校の歴史に生きていく。



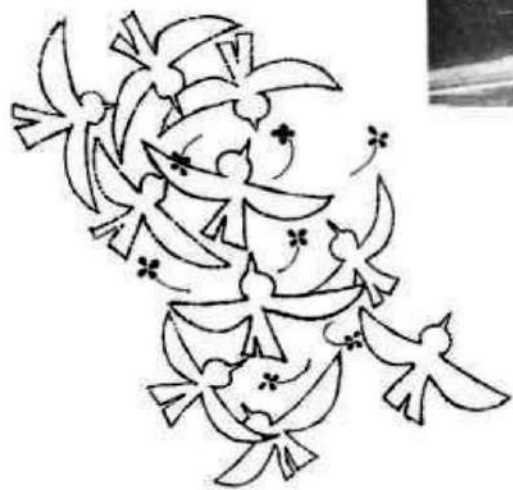
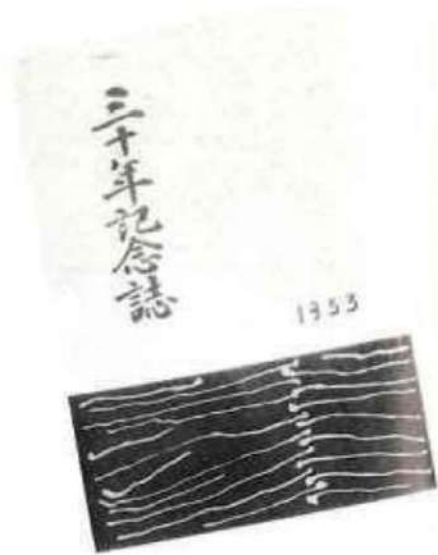
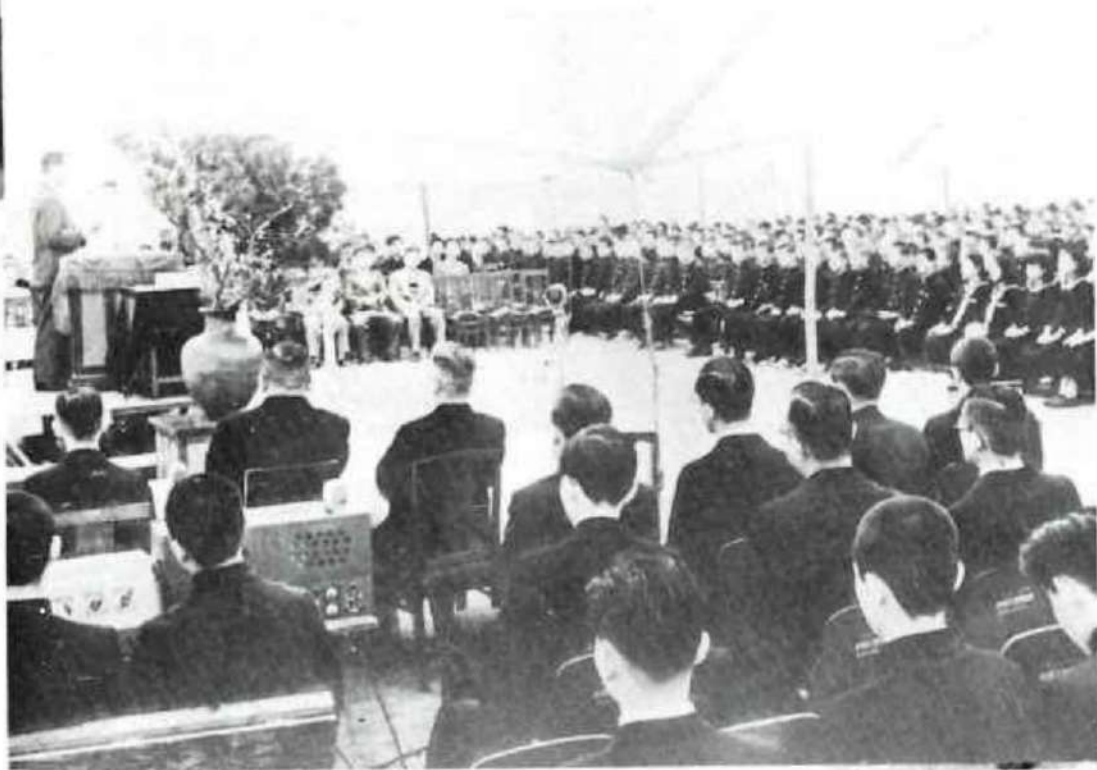
自前自賞め、これら運動クラブ自体の活動は、本校のごとく校内競技大会の盛んな高校は県下でも有数ではあるまいが、その間わぬ、クラス対抗の優勝大会など、あらゆるスポーツ部門で参加し、それには教師チームも対等の条件で参加するなど、全校ぐるみ日常不断の体育活動も極めて盛んなことを併せて記しておこう。本校プールの落成が前年三月五日、その翌日、かのジェーン台風が襲来し、本校も戦後最大の被害を受けることになる。この期間に尽された関係者各氏の苦心なども、忘れ難い思い出のひとつである。

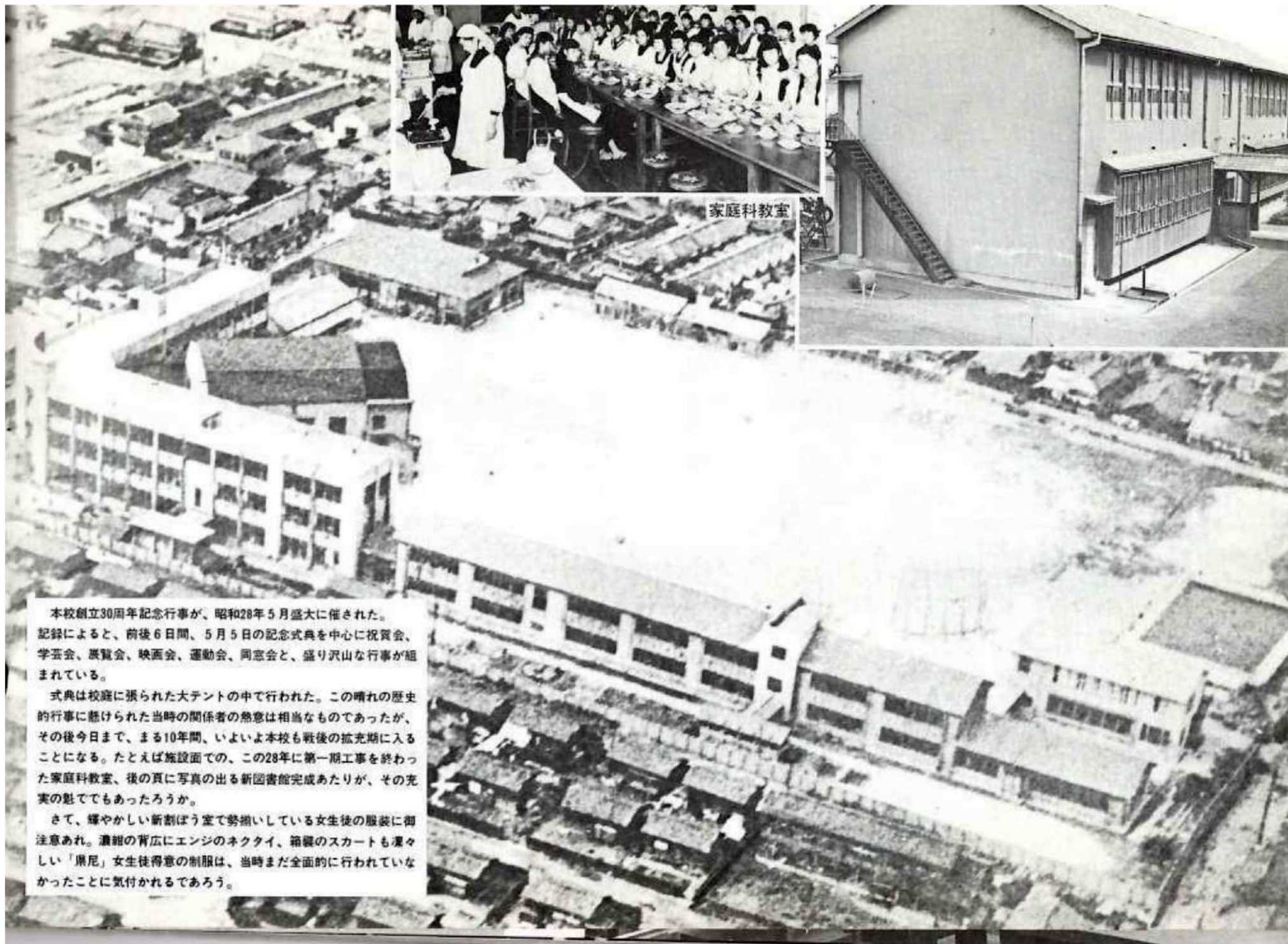


昭和31年兵庫県予選優勝



昭和25年選抜記念



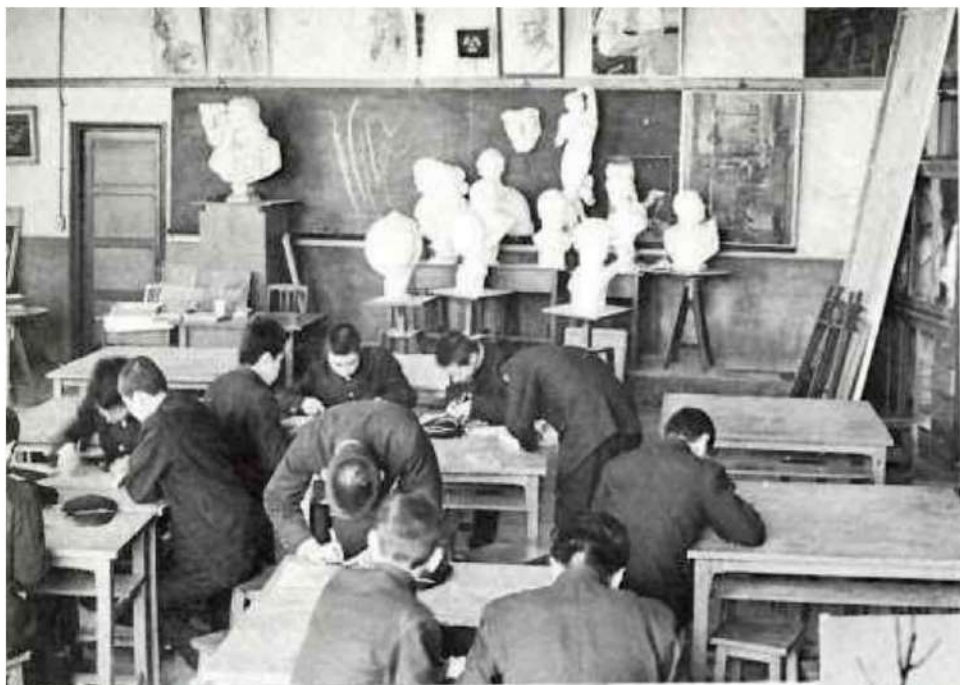


家庭科教室

本校創立30周年記念行事が、昭和28年5月盛大に催された。  
記録によると、前後6日間、5月5日の記念式典を中心に祝賀会、  
学芸会、展覧会、映画会、運動会、同窓会と、盛り沢山な行事が組  
まれている。

式典は校庭に張られた大テントの中で行われた。この晴れの歴史  
的行事に懸けられた当時の関係者の熱意は相当なものであったが、  
その後今日まで、まる10年間、いよいよ本校も戦後の拡充期に入る  
ことになる。たとえば施設面での、この28年に第一期工事を終わ  
った家庭科教室、後の頁に写真の出る新図書館完成あたりが、その充  
実の魁でもあったろうか。

さて、輝やかな新制服姿で勢揃いしている女生徒の服装に御  
注意あれ。濃紺の背広にエンジのネクタイ、箱巻のスカートも派々  
しい「東尼」女生徒得意の制服は、当時まだ全面的に行われていな  
かったことに気付かれるであろう。



6代 伊藤校長



7代 田中校長



第6代校長伊藤八郎氏、7代田中二郎氏、8代渡辺勲氏と、功績を残して前校長が離任すると、抱負を抱いて新校長が来任される。——現川崎校長まで、この10年間学校内外に種々の変化発展は見られるものの、はは落ち着いた世相の中では、学校での生活そのものは、或いは日々是似タリといったようなものでもあったろうか。

写真に見るように、連年連日、学校では各教科の授業が地味に熱心に進められて行く。何と云っても、学校生活で一番大事なのは学習だ。そして、その真髓が生徒と教師の呼吸がピッタリと合った授業であることは論をまつまい。

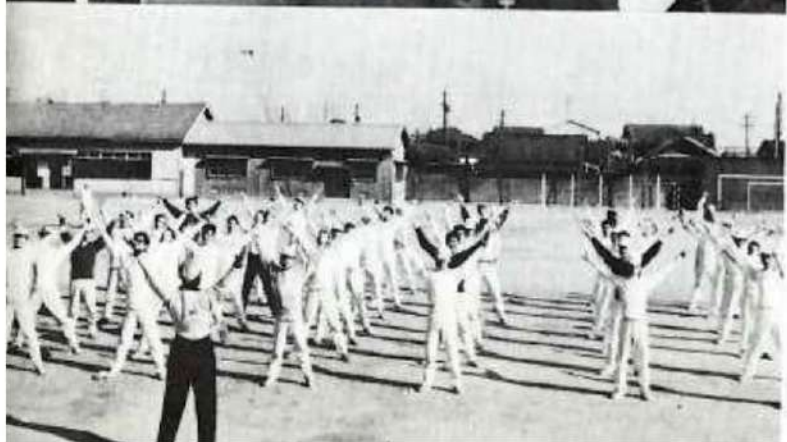
新しい図書館での生徒の自習も順調に育ってゆく。





8代 渡辺校長

旧図書館



現図書館

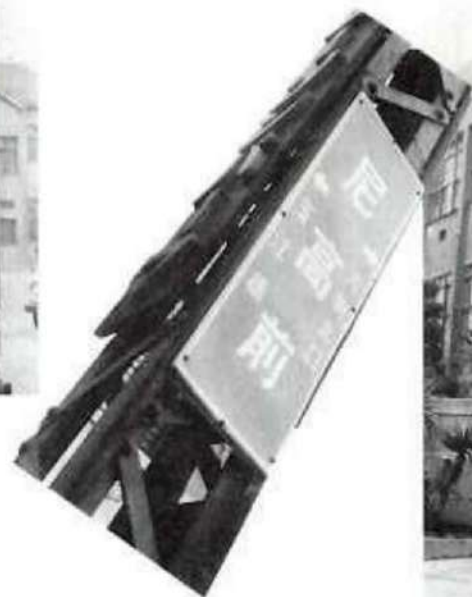








根性を秘めた、はつらつたる生徒群像



#### 校外編。

阪神国道線電停「尼中前」の呼称は、戦後も長くそのままだったが、「尼崎商工会議所前（略して、「会議所前」の名で呼ばれていたようだが）」に変わり、また現在の「尼高前」に落ち着いてまだ2年とは経ってしまい。ところで、余談だが、本校の世間での略称は「尼高」だろうか。それとも「県尼」だろうか。一説には大体昭和30年頃までは「尼高」で、その後「県尼」となったようだと唱える人もある。いずれにせよ、生徒たちは交通地獄の中を毎朝登校してくる。歩いて、自転車にまたがって、また電車やバスに乗って。大都会尼崎市の高校生ともなれば、新設のシグナルの明滅にも敏感で、正確だ。





職員室



生徒会投票



つぎは、校内編。

まず堅いところで、生徒会の役員選挙風景。25年は初代の執行委員が男子2名女子2名の自然の配分で選ばれて以来、その後年間2期制に変わって、現在にまでこの役員選挙は生徒会の重要な年中行事として続いている。生徒の表情は真摯そのものである。扇形の6冊は、生徒会誌「琴柱」(ことじ)である。32年創刊以来、クラブ活動の紹介などを含めて、戦前の校友会誌「尼中」の伝承を継ぎつつ、内容も漸く落着いてきたようだ。

戦後といえば、ギャラリー変したものに職員室風景があらう。そのかみの、厳めしくも寄りつき難かった職員室しか知らない戦前派の人々は、今日のその和やかな空気と風景は想像を絶するものがあると思う。食堂兼生徒ホールでの生徒同志の談笑も、いまではすっかり板についてきたようである。



食堂



マラソン



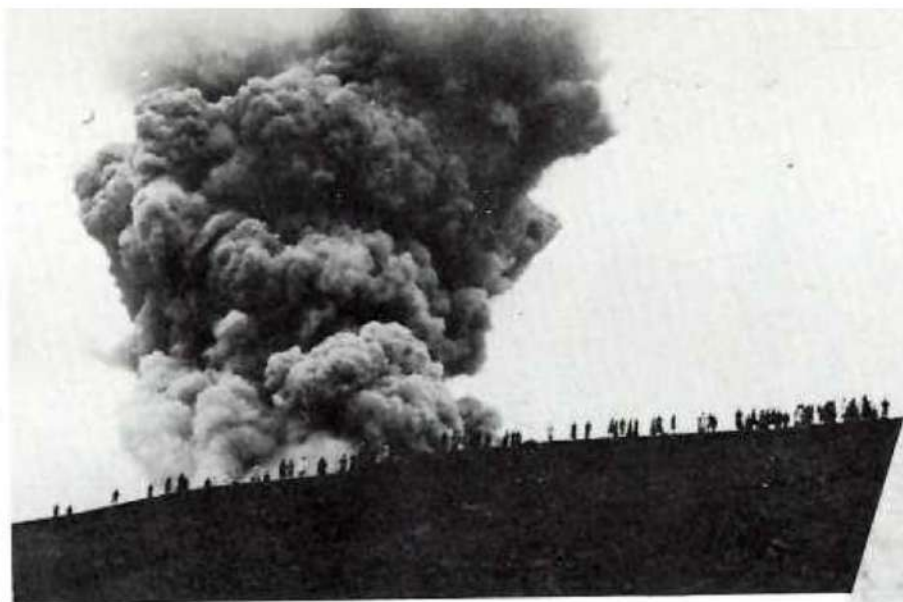
嬉野キャンプ

蒜山キャンプ



校門を女生徒の一群がせわし気に走り出てゆく。マラソンの出発なのだ。尼中時代の6マイル競争の流れを汲む。この体育行事は、なかなか面白いものだったが、最近では本校界隈の交通事情の悪化で中止になっているのは残念である。

その代りの学年末近く行われる甲山方面への徒歩遠足もその一つだが、ここ数年で、いわゆる「野外活動」が本校でも非常に盛んになり、写真に見る1年生全員の嬉野合宿キャンプ、有志の夏期休暇蒜山キャンプのほか、冬季の信州スキー合宿訓練、スケート教室などの見るべき成果を挙げている野外の諸行事も、新しく本校生の大きい楽しみの一つとなりつつあるといえよう。



戦後、修学旅行が復活したのは本校では25年である。以来、旅先こそ東京・日光方面、九州方面、あるいは九州へも足を伸ばして南九州までもと、年毎に小さい変化はあっても、生徒たちには春秋の遠足にも増して、やはり在学中最大の期待の行事として実施され続けてきた。

ちかごろ修学旅行についての論議が盛んで、改廃の声も一段と高いようながら、写真の、生徒たちのめずらしく遠かな表情を見ていると、異郷の背景とあいまって、何やらなつかしい旅情が浮かび上ってくるようでもある。





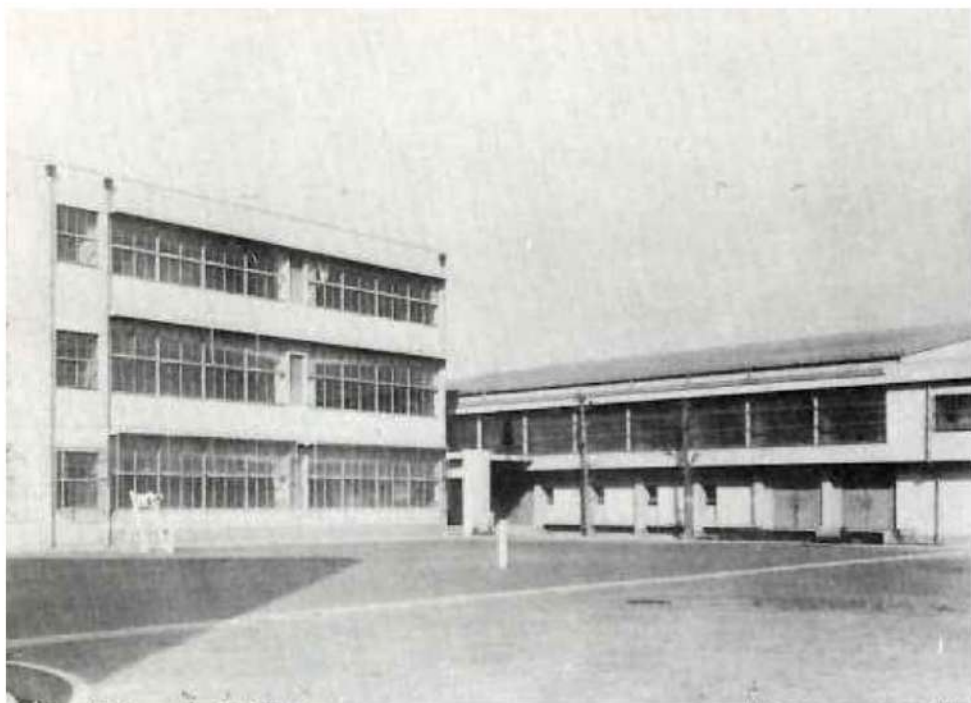
この写真は、昭和二十一年、東京の某所で撮影されたもので、大勢の若者がダンスを楽しんでいる様子がよく見られる。背景には建設中の建物が見え、戦時下の生活の一端が窺える。



体育行事、文化行事はもとより不断のものだが、いわばその芯となるものに例年の体育祭、文化祭の生徒会行事がある。体育祭における各運動部のデモンストレーション行進の人気は圧倒的なものがあるが、——平常その活動が全く地味なだけ、殆んど目立つこともない、文化部各クラブの日頃の研鑽の余蘊が内外に紹介されるのは、それこそこの文化祭という機会を除いては先ず少ないのではなからうか。

体育祭、文化祭とも益々盛大に育って行ってほしいものだ。

さて、校長室の戸棚に各種優勝盃や優勝旗がスラリ並んでいる晴れがましい光景は、本校の盛んなクラブ活動を示すささやかな側面といえようか。



左・新館 右・体育館



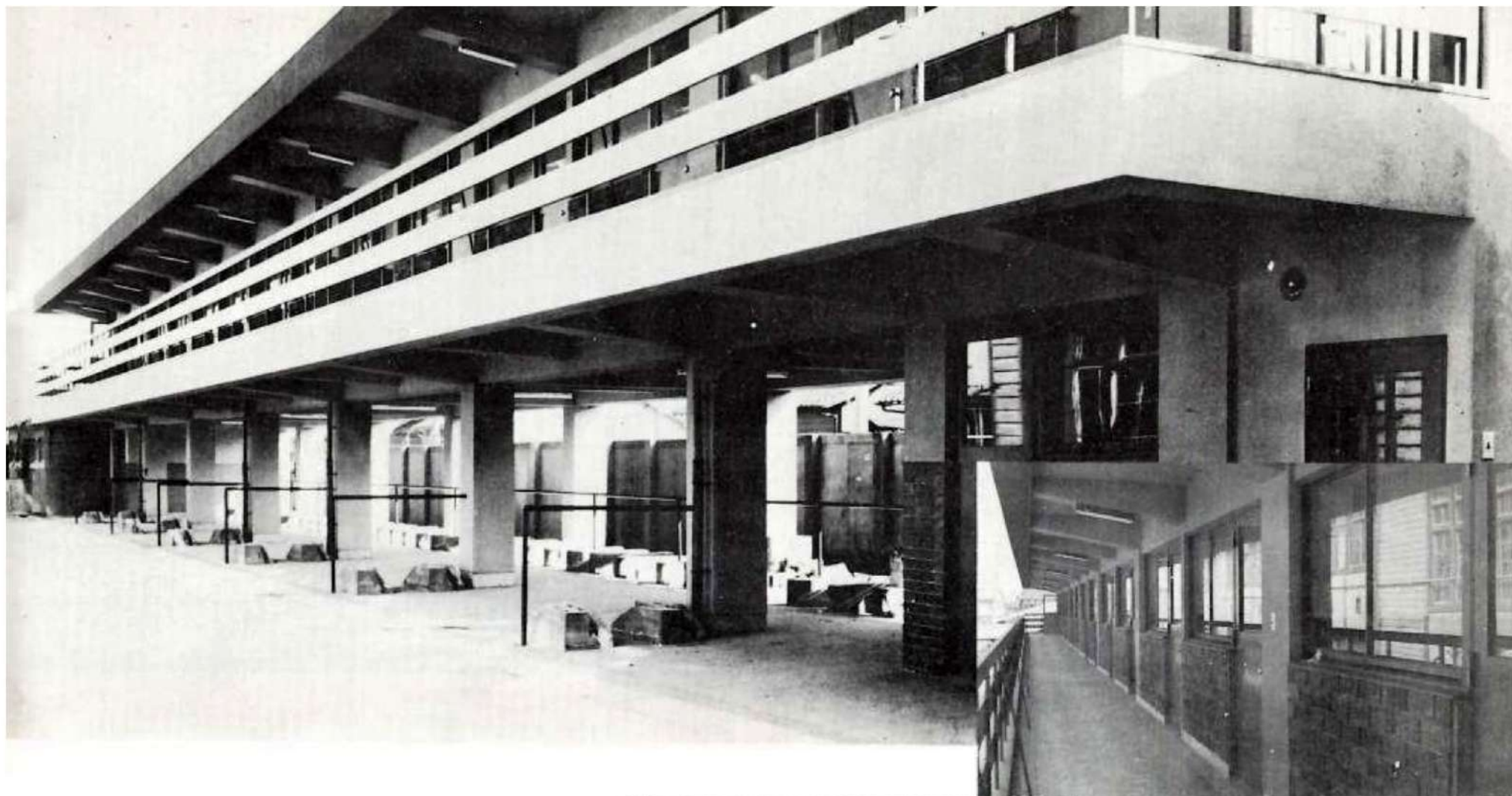
体育館内部



図書館から見下ろす、校庭の片隅の小さな池のほとりには新しい季節の色がある。やがて池畔の雪柳が真白い花を咲かせるだろう。

昭和34年5月、鉄筋旧館に北接してうす緑色の新館校舎が竣工、続いて36年4月には待望の新体育館が落成、その体育館開きに小野選手以下のオリンピック候補体操選手を招き、その華麗な演技に接したことはまだ記憶に新しいところである。



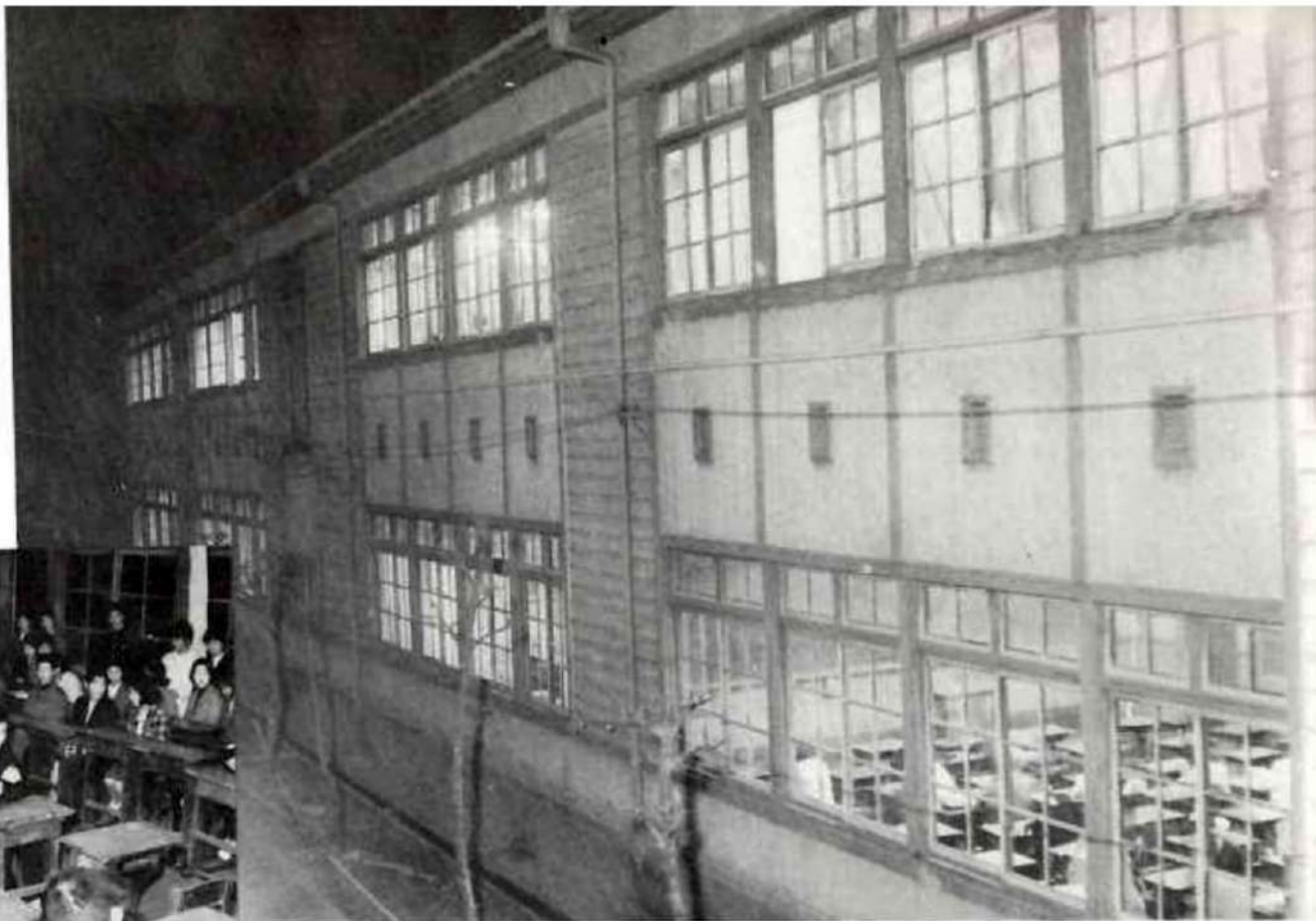


2階部室

また、今春には、多年懸案の文化部部室が、木造校舎南側に、階下の空間を自転車置場に当て、二階建の瀟洒な姿で完成した。施設面でも年を追うてますます充実してゆく本校である。



自転車置場



本誌の巻末の小校史に見られるように、本校に定時制課程が併置されたのは、昭和24年1月のことである。産業都市尼崎の勤労青年のため、進んで高校教育の門戸を開いて15年、その間に果たした役割の大きさが顧みられるにつけ、今後一層の充実が期待されることだ。

写真は、蛍光灯のもと服装もまちまちの定時制ならではの授業風景。黒板のあたり立錫の余地もない討論会。市内定時制高校合同文化祭プログラム。そして、今夜も教室の灯下で勉強にいそむ生徒の姿が窓越しに見える木造校舎の夜間光景。いずれも、心して見てほしいものばかりだ。

本校のある田校長が「定時制の卒業式くらい涙ぐましいものはない」といわれた言葉が忘れられない。これは決して感傷でなく、生徒諸君の克己の在学4年間に対する感動と親帽の涙なのだと信ずる。



卒業式



送りだし



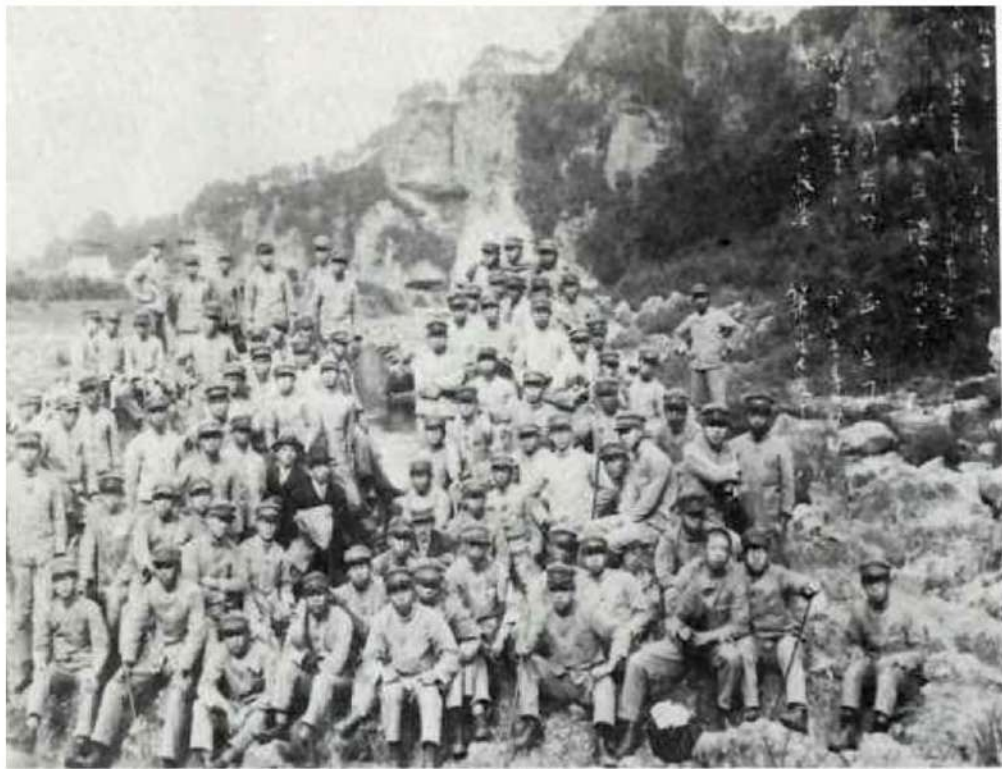
テーブル・マナー



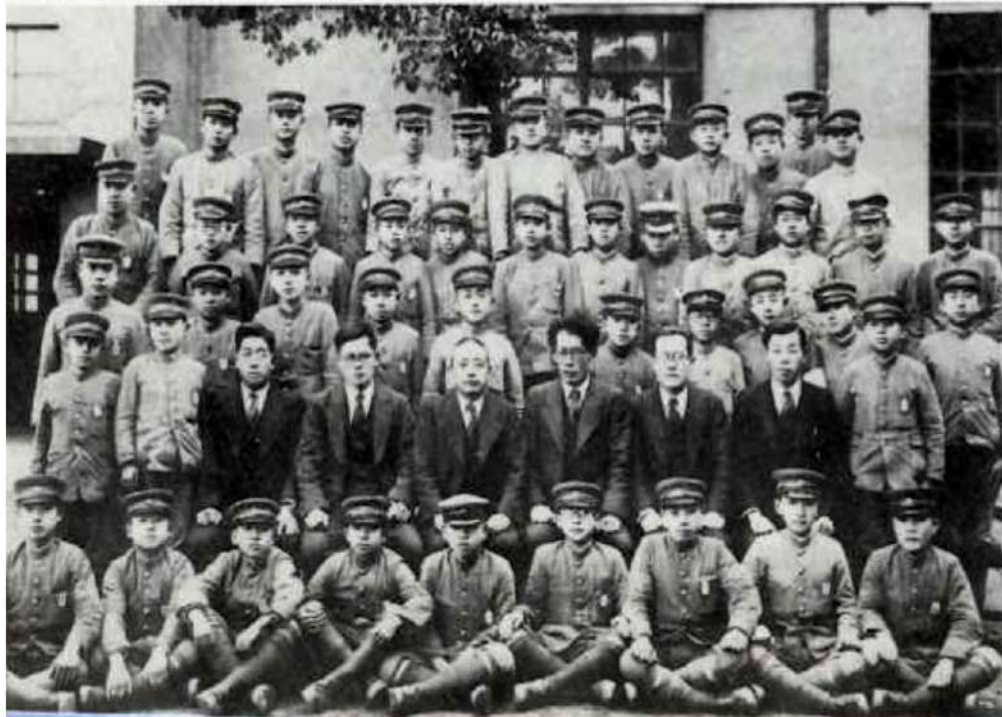
全日制の卒業期のあわただしさは、また格別だ。進学志望の生徒たちは、最後の五分間の努力に余念がない。一方、就職する者は社会見学、テーブルマナーの講習等々、結構忙しい日常を重ねつつ、晴れの卒業証書授与式を待つのである。

昭和3年3月6日、尼中第1回卒業式が挙行されて以来、今年2月25日の通算36回生まで、本校の卒業式は毎春連綿として行われ続けてきたわけだ。

3カ年の曇雪の功成って、めいめい卒業証書を手に、本校の今や名物行事の一つとなった「送り出し」の拍手の波の間を、男女卒業生はそくばくの思いを胸に校門を立ち去ってゆく。父兄と、教師たちの祝福と惜別の拍手が、いつまでもやまない……。



第1回卒業記念旅行

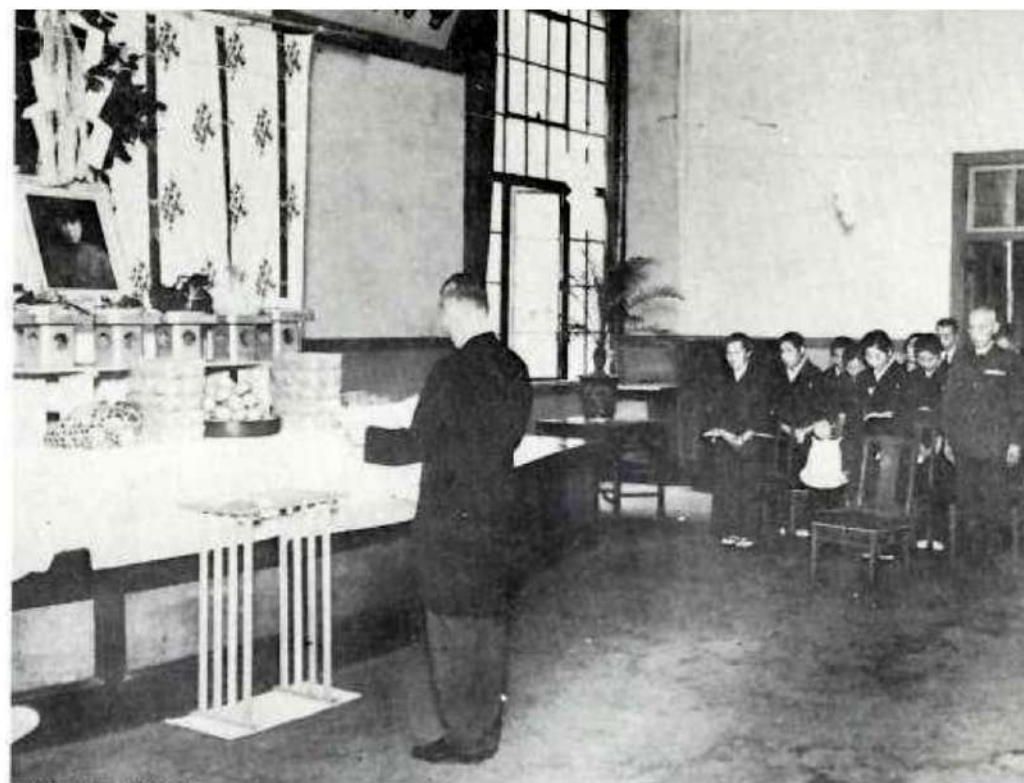


太平洋戦争開始時のある学年

## — 沿革概要 —

- 大12. 3. 19 文部省兵普第38号をもって尼崎市立中学校設立認可(定員750名)
3. 23 尼崎市立高等女学校長荒川宗太郎氏校長事務取扱を命ぜらる。
4. 9 第1回生の入学式を挙行し、尼崎市立中学校として開校。当分尼崎市常高等小学校を仮校舎とす。
8. 17 兵庫県立第一神戸中学校教諭吉野平藏氏初代校長に任ぜらる。
8. 28 北大物町に敷地を定め、鉄筋校舎建設工事開始。
9. 1 吉野校長着任。
13. 5. 5 現校舎の一部成り、この日を開校記念日と定む。
14. 12. 14 三階建鉄筋コンクリートの校舎竣工。
- 昭2. 4. 3 尼崎市立中学校校友会発足。
- この年初めて一年から五年迄の全学年が揃い、定員750名の尼崎市立中学校の完全な姿が出来た。尚この年、校歌が制定された。(本校教官福武周夫氏作詞、県立第一高等女学校教官田中銀之助氏作曲)
3. 3. 6 第1回卒業証書授与式挙行。(卒業生85名)
5. 4. 1 県営に移管し、校名を兵庫県立尼崎中学校と改称。
7. 6 吉野校長県立第二神戸中学校長に転任。後任として兵庫県視学兼風公江喜市郎氏着任。
8. 4. 2 尼中同窓会発会式挙行。
5. 10 10周年記念御真影奉安殿竣工。
5. 13 創立10周年記念式挙行。
10. 4 生徒保護者会発会式挙行。
9. 5. 5 中庭完成、二宮尊徳像除幕式挙行。
9. 21 室戸台風襲来し、本校の被害甚だし。
10. 4. 1 本年度より生徒定員を1250名に増加。
11. 4. 30 公江校長病気のため退職。奥山教諭校長事務取扱を命ぜらる。
5. 30 兵庫県立龍野中学校長山田宇三郎氏本校校長として着任。
12. 10 新築道場竣工。
12. 7. 7 日華事変勃発、爾後本校関係者の応召しきり、且つ世情も多端となる。
8. 31 工作教室竣工。

- 昭12. 9. 4 山田校長退職し、兵庫県立州本中学校長晴山西松氏本校校長として着任。
13. 9. 30 二階建木造校舎の増築竣工。
11. 19 講堂の増築竣工。
15. 4. 8 晴山校長転任し、後任として県立加古川中学校長中井修一氏着任。
16. 5. 20 校友会を解散し、報国団を結成。
12. 8 早朝対米英宣戦布告さる。
19. 5. 上旬 学徒動員壮行式挙行。
7. 下旬 校内に軍隊の宿营地仮設され学校施設特に樹木荒廃す。
20. 3. 27 中学校令が改制されて四年制度となり、第18回生152名、第19回生208名の卒業証書授与式が挙行された。
8. 15 第二次世界大戦終了
21. 1. 上旬 中学校令が改制され、再び五年制度となる。
3. 23 第20回卒業証書授与式挙行（卒業生31名）
23. 3. 24 学制改革により新制高等学校令が布かれ、兵庫県立尼崎高等学校と校名を変更し、併設中学校を設く。
6. 下旬 新学制に依り、学区制が布かれ、本校並に市立尼崎高等学校に在学する男女生徒を国道を境に折半することに決定。
7. 1 男女共学制を実施。
10. 30 中井校長退職し、兵庫県立夢野台高等学校長事務取扱伊藤八郎氏本校校長として着任。
11. 中旬 PTA発足、初代会長六島誠之助氏。
24. 1. 25 定時制課程を併置（中心校定員200名、浜脇分校定員200名）、安福英三郎教諭主事に任命せらる。
3. 5 第23回卒業証書授与式を挙行。（旧制中学校11名、新制高等学校66名、併設中学校281名）。
4. 1 尼崎市立商業高等学校の廃校に依り同校生徒を取寄せ、商業科課程を併設。
4. 10 定時制課程に良元分校を開校。（定員200名）
5. 16 生徒会規約制定され、各クラブ発足す。
- 生徒会役員選挙行われ、初代役員として次の四名が選ばれた。  
会 長 宮本多美子（3年） 副会長 中野哲郎（3年）



戦没教員慰霊祭

珠算教室（商業科）





昭和33年頃の俯瞰写真

昭和37年度職員



書記長 栗山 淑子(2年) 会計長 中島英二(3年)

- 昭24. 9. 29 新校章制定(1年水谷恒男君案)
- 11. 26 第1回文化祭開催。
- 25. 4. 1 家庭科課程を併設。
- 4. 15 定時制課程中心校定員400名に増加。
- 5. 23 道場を体育館に、工作教室を音楽教室に、普通教室を家庭科教室に改装。
- 9. 1 25米プール竣工。
- 9. 3 ジェーン台風襲来、校舎内外に多大の被害あり。
- 26. 4. 15 定時制課程中心校定員600名に増加、浜脇分校を西宮市に移管。
- 10. 27 新校歌発表式挙行。(本校教諭中松正昭氏作詞 本校教諭田口寛氏作曲)
- 28. 5. 5 創立30周年記念式挙行。
- 8. 2 家庭科教室第一期工事竣工。
- 8. 31 放送室及放送施設工事完了。
- 29. 3. 20 商業課程の募集を停止。
- 4. 1 伊藤校長退職し兵庫県立姫路東高等学校校長田中二郎氏本校校長として着任。
- 31. 3. 30 家庭科教室第二期工事竣工。
- 4. 1 生徒定員1350名に認可変更さる。
- 4. 15 田中校長転任し、兵庫県立津名高等学校校長渡辺勲氏本校校長に補せらる。
- 33. 10. 1 音楽教室を移転し、道場に改装。
- 34. 5. 20 鉄筋三階建校舎増築工事竣工。
- 6. 1 新学則制定。
- 35. 4. 1 家庭科課程廃止。
- 4. 1 渡辺校長転任し、兵庫県立姫路東高等学校校長川崎操氏本校校長として着任。
- 36. 4. 2 体育館完成披露式挙行。
- 38. 4. 上旬 生徒会合同部室兼自転車置場竣工。
- 5. 5 創立40周年記念式典挙行。

— 編集後記 —

40周年記念誌を写真集にするということについて、編集会議でことさらとくに意義を論じあつたわけではない。ただ最近この種のものも多く、また本校ではかつて試みられたこともないので、一度このようなことをやってみてもおもしろがろうというのが皆の意見であつた。以前の30周年記念誌との形式上の重複を避けたという気持もはたらいていた。

だが、過去40年間の写真が、本校に整理され、保存されているというわけではなかつた。まず、写真を集めるということからして、大変な仕事であつた。創立当初から戦前の尼中時代の写真もさることながら、とくに戦争末期と敗戦後の数年間の時期——実はこの時期こそ、本校40年の歴史にとって最大の激動と変革の手前であつたのだが——この時代の写真は、苦勞して採しまわつたがいもなく速に入手できず、ごらんのように空白になってしまつた。このような事情もあつて、時代により写真の密度に差がで、説明文で補わざるをえなかつたことは残念であるが、そのこと自体がまた当時の事情を雄弁に物語っていると云えるかもしれない。とはいうものの、わたしたちの努力の至らなかつたことをここでおわびするとともに、いつかまた写真集を再度編む時のためにも、また資料保存の意味からも、この記念誌の空白をうめる貴重な写真をおもちの方は、ご連絡いただくと幸甚である。

ともかく、写真採集のために半年近くも費やすという不手際から、適切な時間に追われ、写真の質の選択はおろか、構成・デザイン・説明文の面などきわめて不完全なものになつてしまつた。しかし、なおかつこの記念誌が人々に多くのことを語り伝えるとすれば、それはわたしたちの貴しい努力の裏というよりも、一枚一枚の写真そのもののもつさびしいリアリティの偉力であろう。また、それが写された時は、それほど意義あるものでなくとも、時がたてば、写真はファインダーの枠を超えて不思議なコトバをもつという写真の魅力によるものであろう。はじめての試みて、いささか冒険的であつたが、わたしたちは、いまこのような形式を収めてとつてかえつてよかつたのではないかと思つている。ご高評いただければ幸である。

最後になつたが、多くの方々から、この記念写真集のために、大切な写真資料をこころよく提供していただいた。なおヨシガ写真館の竹崎康友氏からは、終始全面的な協力をいただいた。記して謝意を表したい。

〔県立尼崎高校40周年記念誌編集委員会

一階正晴、住田金三郎、中松正昭、藤本 優、守脇 正

写真資料提供：毎日新聞社・尼崎市役所  
（旧職員）定政熊雄、岩村 正  
（卒業生）鴻池藤夫、黒田貞雄、西原嘉久、谷垣 宗  
岡本 忍、妹尾忠弘、足立甲一  
（市尼卒業生）小山住代子

写真撮影協力：ヨシガ写真館・竹崎康友  
印刷所：凸版印刷株式会社

